

市史しぼれ話

108

共興地区

共興地区は、一八八九年（明治二十二年）の五か村合併でできた共興村を継承したものです。共興の起こりは、それより早く、一八八二年（同十五年）に小笹学校と長谷学校が統合を申請する際、「この学校が」共に振興

するように」との願いが込められていたとされています。

明治初年からの制度のなかで、長谷、吉崎、東小笹、西小笹、登戸の五か村が連合して行政を進めてきました。そのため合併協議も順調で、市域十か町村のなかでは最も早く、同二十一年十月に申請されました。

江戸時代になってこの五か村の村域が決まりましたが、集落は古くから開けました。九三〇年代に匝瑳郡十八郷のうち「長尾（ながお）郷」がのちに長井（ながい・なげい）、長谷（ながや）と変化したと考えられます。

長谷、吉崎は海岸線に面し、歴史史料がほとんど残されていないものの、現存する神社や苗字などから平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて紀州・熊野神社の荘園（しょうえん）であったことや、

その後、千葉氏族の進出により集落が形成されたことがわかります。

記録をたどると、一五九〇年（天正十八年）八月、本多康俊が小笹郷（現在の共興、平和、野栄町野手の一部）に五〇〇〇石で配置され、約十年間小笹藩が存在しました。その後、小笹は東小笹と西小笹に分かれますが、これも歴史的影響によるものです。

長谷村では、一六八五年（貞享二年）に海水をくみ上げ大釜で製塩する釜野をめぐる争いにより村の半分にあたる四十七人が罰せられる事件がありました。また、吉崎村では、一六七〇年（寛文十年）に楢湖つばきのうみの干拓による排水で土地流失など大きな被害を受けました。改修された現在の新川からはそうした苦難の歴史を思い浮かべることがむずかしいといえます。

東小笹、西小笹村と他村の間には沼地や用排水路となる川もあり、それらをめぐる争いも絶えませんでした。カッパの証文「ふりそで橋」御門霊神みかどれいしん」などの伝説は、争いに苦しんだ農民の生活から生まれたものでしょう。

昭和四十年代後半から五十年半ばにかけて、この海岸をめぐる観光開発問題も今は歴史の彼方に消えました。



改修された新川河口周辺（共興地区吉崎）